



續拾遺和歌集
下

特 別
A4
8099
12(2)



續拾遺和歌集卷第十一

戀哥一

正治百首方たてまりりくふ恋哥

皇太后文書復成

恋歌の深きうらみはねむるをえんてくはるるを

初戀の心を

七御門院法皇

恋のこころをいふはむすむすのうらみはねむるを

弘長元年百首方たてまりりくふ恋哥

衣笠田大臣

恋のこころをいふはむすむすのうらみはねむるを

恋のこころ

田大臣

恋歌



高麗の神をいふ海をてつてわしにてしを神乃わたり

前橋政左大臣家持

高麗の神の玉神の玉をわたりてしを神乃わたり

家持百首言ふえぬまはりし神意

後醍醐天皇御用白土守言

高麗の神の玉神の玉をわたりてしを神乃わたり

家持百首言ふえぬまはりし神意

前大細言意宗

高麗の神の玉神の玉をわたりてしを神乃わたり

建長二年八月十八日奉る御札言合し忠意

右右兵衛衛者教

高麗の神の玉神の玉をわたりてしを神乃わたり

洞院権政家の百首言合し忠意

常盤井入道前大政言

高麗の神の玉神の玉をわたりてしを神乃わたり

後醍醐天皇御用白土守言

高麗の神の玉神の玉をわたりてしを神乃わたり

春宮少将

高麗の神の玉神の玉をわたりてしを神乃わたり

建長三年九月十三夜十首言合し忠意

高麗の神

万里小路右大臣

あまのたねのふりかへりては
百首あはれなり

太上天皇

我らり志はあらずに
春宮大史実美

辨及之の志は
藤原家

藤原家
前大御言為家

ふりかへりては
後醍醐院

後醍醐院
藤原家

あまのたねのふりかへりては
藤原家

藤原家
前大御言為家

あまのたねのふりかへりては
藤原家

藤原家

あまのたねのふりかへりては
藤原家

藤原家
土御門院小宰相

あまのたねのふりかへりては
藤原家

藤原家

あまのたねのふりかへりては
藤原家

藤原家

あまのたねのふりかへりては
藤原家

藤原家
道助は

系議雅經

吾新が口袖よりこれの物たるの事ありたれ

新より

堀三位行家

そけいとも雅はまむかひの物我より又心より花を

前左兵衛督教定

ふゆかかみたるもそより公命りて夏に心をなや

忠久意の心を

前大内言考氏

いそけいなるひとのたれもそまね申る余あり

前大内言考家の百首より

正三位知家

年少れ^まそむる志むかきあめ志むいひてあふるを

貞治元年事合と忠久意

前内大臣

今事合ひあはれてくらねや袖と年少れ^まそむる

院并内侍

けいふ^まそむるふらあめはあはれとそむる人^まむる

建長二年九月十三日事合と忠久

兵部少輔

さそ^まそむるまあるその榮ら^ましほのたつら^まと

新より

入道二品親王御助

さそ^まのたれ^まなりねま^まそむるあそ^まとあそ^まのあそ^ま

建仁元年事合と忠久

芥中油言定家

吾等おのゝの本業をゆゑに志を成すに代りてを

憂言は申し ぬれは仰

種の方をその人より言はせしむるにせむかひを

交治百首言たてまつる書に書言

前大油言基長

廿二種の子を成すやれは其のゆゑに

文永七年八月十五日書に書三首初り書

藤原為世初

ふたつていひ入らむせはのこるを

今出川院近衛

むすし袖の妙の妙の妙の人の人

春宮大飛

そとに人あはらむはひに

從二位行家

廿二種の子を成すやれは其のゆゑに

中務卿宗尊親王

そとに人あはらむはひに

廿二種の子を成すやれは其のゆゑに

未對面應とつる言

皇太后言大書後成

人あはらむはひに

洞院信政家百首并り

正三位公家

年々とまけさしゆまはひの秋の暮をけき秋夜をけ
弘長元年百首秋たぐまの暮の思慮

并大西言隆房

つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ
寄書云とつるうらら

高階宗成

つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ
息云此中ふ

并大西言隆房

つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ

女のみよをほつりつるもたれすう上を
つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ

前大西言隆房

つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ
秋の暮

藤原則俊和房

つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ
九條右大臣女

侍堤雅有

つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ
侍堤雅有

つゆもなきはそ風をみらぬの暮をけき秋夜をけ

千五百番并り合

前大御言意宗

其所に様ありや世に御海の川にかなはるる人

其言中、
前大御言意宗

様は子に世にまはるる世に御海の川にかなはるる人

大將の御言意宗

前大御言意宗

今に御言意宗

山階入道大御言意宗

前大御言意宗

今に御言意宗

家言言意宗

後法皇入道前大御言意宗

今に御言意宗

刑部言意宗

今に御言意宗

名言言意宗

信正行意宗

今に御言意宗

皇太后言意宗

今に御言意宗

言意宗

太上天皇

ふゆいさのふゆいさふゆいさふゆいさ
典侍敦子朝臣

金ねまのむすぶとふゆいさふゆいさ
西行法師

みさのふゆいさのふゆいさふゆいさ
千五百番子合

わねのふゆいさのふゆいさふゆいさ
後京極権政前太政大臣

あとのふゆいさのふゆいさふゆいさ
後鳥羽院御製

あとのふゆいさのふゆいさふゆいさ
あとのふゆいさ

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

續拾遺和歌集卷第十二

戀歌二

歌あつた

前用白丸大臣

系

今もこの世の存ひとしをふじりあはれなる風まをす

常盤井入道前大臣

又歌あつたを浦よりとらふはむねをいふにふく

若菜百首歌たふしゆりくふ

從三位行純

空ありたにお念ふりいさやせの浦は望のりり

無名中

梅雲使高亮

よれつるその心とありあやめれこもれあつたる

赤橋政左大臣

下とよひしむかひの夕戀をよむるも若くはた

前大納言孝氏

いふよする若くは軍のひれをよめいのみあつた

持中納言云

かひるやよまをわが女戀の若くはにむかひ

美治百首言たてまうき舟雲戀をいふる

持大納言忠信

くやとよめ軍のたふりむすらののむかひ

歌あつた

大藏卿有教女

空ありた海回のむかひをよめいのみあつた

神々

按察使高定

さてはらうと物と移りて多きと多たふらん

藤原伊信朝臣

わがたはまるといひのたごまてらるる風とて推をたふ

右京景家

やをたはらひてささげさるる好きと物とまてらるる

平時村

あつらひてまてらるるをさるるまてらるる

平宣時

わがたはらひてささげさるる好きと物とまてらるる

入道二房親王家みす首なり

侍從雅有

多神のそとをたふれぬとてたふれぬとてたふれぬ

多神の中に 侍信正實伊

わがたはらひてささげさるる好きと物とまてらるる

多神の中に 侍信正實伊

前大御言忠良

多神のそとをたふれぬとてたふれぬとてたふれぬ

大死口有家

わがたはらひてささげさるる好きと物とまてらるる

弘長元年百首言なりてしほりきり不逢

常盤井入道前大政大臣

風もきずきの入は浪としてわらきずねふわく袖系

家に奇命ゆりやふし

中御言家成

わらわすのゆきりやむらぬをきりぬらぬ袖乃命

歌云次

古法門院法皇

しよる神のまゝをせぬをちりり一人言所の然

奏治百首言をまらつる言所就癒

常盤井入道おとよ姫

あまのつゆのきふかき糸のきりてむらぬのらむ

歌不知

忠孝入道前法成天皇

こころをたぬをみせしむりねとむすくせふ

洞院権政家の百首言より不遇癒

孝登井入をあらぬ政上

かゝる言のまらぬむらぬのむらぬのむらぬ

弘長三年由裏百首言より不遇癒

前大御言考氏

ねんをねんぬるはけつとまま田舎のむらぬ

歌あり申し

賀茂重保

うらなむらぬのむらぬむらぬむらぬむらぬ

和泉式部

みゆかむらぬのむらぬむらぬむらぬむらぬ

正治百首言

正三位御家

新古今和歌集のいかにしむるにまゝの歌はなほ

新古今

久人志守

後醍醐天皇の御代に申すに、この歌集は、

文永十年七月由裏七首歌なりし時

光後朝臣

そのうち、いかにしむるに、まゝの歌は、

無名

二位朝臣

たのむるに、いかにしむるに、まゝの歌は、

百首なりし時

式部院法連

後醍醐天皇の御代に申すに、この歌集は、

新古今

平行氏

そのうち、いかにしむるに、まゝの歌は、

無名

藤原為世朝臣

そのうち、いかにしむるに、まゝの歌は、

無名

朝臣

そのうち、いかにしむるに、まゝの歌は、

三位朝臣

そのうち、いかにしむるに、まゝの歌は、

無名

朝臣

志つる心ちをたがふを兼ねるをゆかひのきり橋
入道二系親王家五百首并に

津守國助

このまゝの御橋かきしふ命とていへるまじりて
建長三年吹田あきく十首あきとて下流りくふ

院并内約

わあもは流とてあきくはこれたてとえやいあかん
息のあきとて

典侍親子朝臣

阿事に形ふはかたけりて我ふふとていひつ命を
山階入道たご家の十首あきり不遇

前大納言考家

たのめあやかたを察してすゆかひの志乃のめらる

平時直

わあまのあやかたはあきくはこれたてとえやいあかん

中務卿宗尊親王

移今とてあきくはこれたてとえやいあかん

平義政

あきくはこれたてとえやいあかん

藤原基教

逢まその命とたてとえやいあかん

平政長

あきくはこれたてとえやいあかん

百首平書一付

先師法親王

海老原守志の書とすけまの書とを授け給ひ奉りて

云々

中務卿宗孝親王家書

かゝる心づきのものなればやのらる世々の御成り

信実御旨

この御成りなれば御成りなればやのらる世々の御成り

云々

左近中将具氏

おぼろしき命を授け給ひ奉りて

常盤井入道前太政大臣家十首書一付

守心

山階入道九上

おぼろしき命を授け給ひ奉りて

文永二年九月十三日首書命不達意

堤二位行家

おぼろしき命を授け給ひ奉りて

云々

伯耆徳清

おぼろしき命を授け給ひ奉りて

多治百首書命

女御門院高余

おぼろしき命を授け給ひ奉りて

云々

宣秋浸丹後

仍為とらるるを 中務卿宗彦親王

まらむとひりすむらむれいづふあけき神は家

父戀とらるるを 安嘉門院河原

世とらるる公をらのすくさあふれあれすはまは

百首言をす時 前右兵衛督為教女

すくあむれあむさふらじせみ又平とたのびる

山階入道大右家十首歌下り約恋

前大細言為家

ゆりさむらむらひまふらふら傳とさたはるるをい

同公を 院并由侍

とらむらむらふらるる業家とさむたのふふらむら

寄船戀とらるるを

前右政左大臣

下指めふとみさむらむらたのり来中此みさるる

文永五年九月十三日奉白河及言合と夜夜の恋

持大細言為任

たらむとらるるをむらむらむらむらむらむらむら

前右兵衛督教定中侍とらるる言合の恋を寄

月戀 真昭法師

ふらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

前大細言為資季

ゆりさむらむらむらむらむらむらむらむら

入道二宗親王家の平首親り

法橋行快

たのひよふひるも雲あくわりのまはれをう月乃る

云々此中に

中務二宗考親王

よこひたのりかたのりをもくわりの乃月まひた

山階入をた大臣

海をたのりわをた大臣とてなげけりありのる

行律師玄光

約はあけさるはたのりそとてなげけりありのる

約名云といふるんを

平於泰

このまこと約はたのりそとてなげけりありのる

法中眞実

たのりそとてなげけりありのる

約一ら次

待賢門院権行

所よりそとてなげけりありのる

中務二宗考親王家の百首あり

典侍親子の信

あつた約はたのりそとてなげけりありのる

約一ら寸

前用白丸大臣 舊司

あつた約はたのりそとてなげけりありのる

言及云といふるんを

藤原為行

高橋親成を討つたが、けりかかればとていふは

意あり申す 式子内親王

はらふは、そのときも、あつたも、ゆりま、いふは

前中納言定家

若殿のいふは、いふは、いふは、いふは、いふは

高階宗成

ついで、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

文永五年九月十三夜、白河の宮、合、恨不達意

行中納言三雄

いふは、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

嘉應二年、行中納言の殿上の合、来不達意とい

ふらんを

藤原道隆

手紙をかき、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

いふは

津守國基

いふは、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

近衛用白左大臣

すけきのいふは、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

いふは、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

普光園入道前用白左大臣

いふは、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

以長元年、百首歌、いふは、いふは、いふは、いふは、いふは

お大由之考家

花のしるを念のたのむかたに袖所(露堂)をとり

衣笠由之旨

月影の夜田はむいさけをみるをと程上(さし)

和文をきこり言ふ人のたらしりきり道の(は)

むいさしを(は)てし(は)り(は)

相模

そなたよりふゆきそつゆん(は)り(は)と(は)り(は)り(は)り(は)

実用意と(は)ぬ(は)

惟宗忠京

力を(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

弘長元年百首歌と(は)ま(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

後二位行家

ま(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

洞院権政家百首言(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

前中納言定家

そ(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

弘長三年九月十三(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

右上天皇

ま(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

和(は)り(は)

前権政大(は)

ほ(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)り(は)

弘長元年百首あつたてまつる不曉列

前大御之考家

口述り成りぬの月式（イ）を以てておつる歌

無事の中

道法法師

尚ほ心付くまゝの月をわきの袖をまに

典約歌子約

あつた中をわらふとまをてりてりわらふ

中務宗孝親王家の百首歌之末の心を

鷹司院侍

まゝのまゝにわらふけはまゝにまゝをまゝにわらふ

契別とてつたて

平清時

ちかき後まゝにまゝをてりてりわらふ

後法寺入道前白家の百首歌之末の心を

皇太后后文之末の心を

おつるまゝにわらふとまをてりてりわらふ

隆信朝臣

来の上とつてはまゝのまゝをてりてりわらふ

密旨百首

二条院預法

おつてはまゝにわらふとまをてりてりわらふ

無事の中

後醍醐院侍

まゝにわらふとまをてりてりわらふ

今方とてしりかたうてはしるべき

権中納言定頼

今方とてしりかたうてはしるべき

中原行実

今方とてしりかたうてはしるべき

京極院内侍

今方とてしりかたうてはしるべき

建保百首言たふしりかたうてはしるべき

志保入道示修政大臣

今方とてしりかたうてはしるべき

貞治元年十首言合逢不遇

後鳥羽院下野

今方とてしりかたうてはしるべき

新ら原 平行氏

今方とてしりかたうてはしるべき

行念法師

今方とてしりかたうてはしるべき

前修政大臣

今方とてしりかたうてはしるべき

後鳥羽院内侍

今方とてしりかたうてはしるべき

家小百首言合逢不遇

中務卿宗尚親王

いふあはるはれはと成るんやむはれはるがら
稀逢雲のころを

中務卿宗尚親王

あはるはれはと成るんやむはれはるがら
百首奇たふまうり時

前中務卿宗尚親王

あはるはれはと成るんやむはれはるがら
平親清女

文永七年九月内裏三首より

藤原隆博卿

あはるはれはと成るんやむはれはるがら
月かきくうり

和泉式部

あはるはれはと成るんやむはれはるがら
女前院

後醍醐院

あはるはれはと成るんやむはれはるがら
弘長元年百首

常盤井入道前太政大臣

うさしとしまはらむる若おんはむれえんのもり月

百首歌をよみしりし時

入道二所執王性助

らるやんひられえんたお影つきありの月

月前慈といふるころと

按察使高定

けろく影かゝるやゆ月ん様とまゐる者の月

右近大将通基母

たのちとせぬおとあつ月のやまの月かゝる月

典侍執子約信

らる影かゝるきりあまをたゝる人えん月

子あつあまの命

大御言通具

あつらせぬお影の袖をそとぬひくさる

あつら

續拾遺和歌集卷第十

意平一

以長元年百首歌をすまらふ時逢不遇を

何らんを

豈堅弁をそふ改之旨

おき世にゆき言ひ分けぬらぬうき世にゆき言ひ

神らぬ

前大納言為家

口をふきまはらふ世にゆき言ひ分けぬらぬうき世にゆき言ひ

前内大臣 基

今をさす子れんを存今又書をありし世にゆき言ひ

平親清女

あはれにゆき言ひ分けぬらぬうき世にゆき言ひ

文永二年九月十三夜奇合不致意

從二位行家

たのりふのむらひをりてをりてのふたふたをりて

九月十三夜五首あふおそくを

前大納言良教

あつちのさやうをりてをりてをりてをりてをりて

言閑意といふ事な

将中納言具房

うき物と存ひてそをりてをりてをりてをりて

洞院梅政家の百首初と遇不逢意

藤原門院少将

かき事のゆかりをりてをりてをりてをりて

意乃心也

あふあふのゆかりをりてをりてをりてをりて

文永五年八月十五夜奇合不致意

太上天皇

そあふあふのゆかりをりてをりてをりてをりて

家之奇合不致意

将中納言長方

ゆかりのゆかりをりてをりてをりてをりて

言乃意

祇部成教

ゆかりのゆかりをりてをりてをりてをりて

前中油言雅言

山吹花をいひくらしき此花ありてはあはれしむるも
無きもの中に 深有長約也

とせしむればのまゝ此花ありてはあはれしむるも
又御道乃目のこといひあはれしむるも

秋節成後

わあひと金瓶花はさしつけしとてあはれしむるも
夏夜を 右馬門番実冬

夏夜をいふあはれしむるも
建仁二年夏十首^カ言合し夏夜

皇太后言事後女

るるや夏も花をいふあはれしむるも
月あはれしむるもあはれしむるも
いひくらしき
實方朝臣

あはれしむるもあはれしむるも
白河殿の七首言事小言治也

後醍醐院法製

あはれしむるもあはれしむるも
あはれしむるもあはれしむるも
あはれしむるもあはれしむるも
あはれしむるもあはれしむるも

あはれしむるもあはれしむるも
あはれしむるもあはれしむるも
あはれしむるもあはれしむるも
あはれしむるもあはれしむるも

かてたかひもきし後并出たあわさきさうゆりて

中務卿宗号親王家乃百首并に

先後朝旨

凡そけたる金持家のいふ式をそむけぬ者乃りたし終

部より候

醍醐入道前太政大臣女

たかむやあしきさうりつていふ子孫傳乃りてりつん

かさうてまうてきさうりつてのちりつていふはゆり

さゆりたなわさうりつてりてつりつる

崇式部

おりふと終るあぬの園の穴にりりりつてりつてりつて

也

さうりつて

しつていふあつてにわらわらわらわらわらわらわらわら

建保百首并にたてまつりつて

兼中納言宅家

さうりつていふあつてにわらわらわらわらわらわら

云々中

太極政大臣

さうりつていふあつてにわらわらわらわらわらわら

百首并にたてまつりつて

権太右衛門長雅

さうりつていふあつてにわらわらわらわらわらわら

山階入道尤太長家乃十首并に等秋風也

安赤門院

梵の吹まきせてまき白糸歌の心をうらみかす

家秋月恋

前田之長云

あまの海よりきたりあまの歌えとつみ袖の月影

鈴ら次

後くら寸

秋のあまの歌の今より秋のまき歌のしほの心

堀二位家隆

まきのまきを御下まはるるるるるるるるるるる

正三位の家

あまの心もやまをみせせの山乃秋の心くち歌

藤原永光

まきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの

弘長元年百首歌子てしほの心くち歌

信実の信

まきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの

家五十首并合言歌恋

光の歌寺入道前橋友長

あまの心もやまをみせせの山乃秋の心くち歌

新志寸

光俊朝臣

あまの心もやまをみせせの山乃秋の心くち歌

順徳院法皇

まきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの

建保百首言たてまきのまきの

光の巻の入念な格致を言

と此のこゝをゆゑとてあましく袖の付白くつゝは
右史を待道徳母のこゝり去るや一室に日くんに
そとよりつゝつゝつゝつゝ

東三條入道前格致を言

世の厚かたを言ひたりぬまけしやまゝとてあゆみ
十月ろろろろろろろろろろ

前中細玄通序

世の厚かたを言ひたりぬまけしやまゝとてあゆみ

題不念

曾祿ぬ忠

ひろろろろろろろろろろろろろろろろろろろろ

女前門後高余

之れらふろろろろろろろろろろろろろろろろろ

院中内侍

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

系議雅雅

海と袖の妙さかきつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

懐中一火

懐中一火 懐中一火 懐中一火 懐中一火 懐中一火

手親清とつるうらな

安嘉門院三條

あつたに手ひの物のほろもをわらわはたこの名にまを

恨絶意

法平實寶

手ひのまをわらわの物たつるうらなを海風を

達長三年田中十首言たまの書に意奇

前大御言考家

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

手親清

手親清女妹

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

堤二位家隆

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

三昭法師

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

あつた

紫戎部

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

あつた

九條左大臣女

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

式乳門院法連

あつたに手ひの物たつるうらなを海風を

白河五七首言に意月草意

前中油言資平

月季のちろくしやんをきりきりあつてふくしん
道助は親王家五十首言中し言事あは

西園寺入道前大政大臣

月季のちろくしやんをきりきりあつてふくしん
文永三年九月十三夜女首言合し改悪

後深徳院法親王

我我田の女の中をきりきりあつてふくしん
意中中し

入道前大政大臣

百首言あたまにけり

持大油言長雅

大油言あたまにけり
意中中し

前衆議忠定

大油言あたまにけり
意中中し

大油言あたまにけり
意中中し

醍醐入道前大政大臣

大油言あたまにけり
意中中し

大油言あたまにけり
意中中し

文永三年九月十三夜五首并合し絶意

前田白太大臣一系

大なる我が命の移りてははらたかき
山階入道太大臣十首款しをす

指中由言云守

あまのあけのち中成はよしのを

勢不効

仁如三系親王守是

かえりて野中の信ありかたて

くえんくらす

あまのあけのち中成はよしのを

行律仰一系

あまのあけのち中成はよしのを

文永三年九月十三夜五首并合し絶意

光俊朝臣

あまのあけのち中成はよしのを

勢不効

右原伊長朝臣

あまのあけのち中成はよしのを

後深織院太師典侍

あまのあけのち中成はよしのを

中務宗孝親王家百首款し

鷹司院師

あまのあけのち中成はよしのを

衣笠内大臣

乃母を神の玉冠のまに海より其のあらはれ
新不念 後鳥羽院法皇

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
百首言事付 前中納言資宣

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
衣笠中に 前用白左大臣 鷹司

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
白左大臣乃面影 乃にまを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
深美泰

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
うのふらと神の玉冠のまに海より其のあらはれ
将女信朝 乃

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
長三年由事百首言事付 乃にまを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
近侍用白左大臣

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
新橋の強う玉を 乃にまを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
九月十三夜 乃にまを神の玉冠のまに海より其のあらはれ

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
将大納言実家

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
文永二年九月十三夜 乃にまを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
入道由左大臣 海邊成

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
年守と神の玉冠のまに海より其のあらはれ
鷹司院梅窓

まを神の玉冠のまに海より其のあらはれ
鷹司院梅窓

ふみせきつこはむしんたのじりそつてんまめ

前田白丸大居士 系

むねをいつにむねんををゆとむかひにゆり

せつこうりり 津守国基

かむしりんのをむかひはきりてまきたのりり

せつこうりり 藤原考徳の信

そむと神のむかひをてんてんてんてんてん

高海慈とてんてんてんてん

後醍醐院法皇

ふみせきつこはむしんたのじりそつてんまめ

弘長元年百首歌をまわすてんてんてん

常盤井入道前太政大臣

そひつと袖のうけ立つるりむかひにむかひ

老翁も入道前太政大臣百首言合言形

前太師言資季

濡りたてのむかひは海とみうりり

あいの心を 中原行範

う見えといふ世にそりむかひにむかひ

中務の宗号親王家の言合

光後朝臣

海にむかひをむかひにむかひにむかひ

前田白丸大居士 系

源朝とよみかきしつひにたしむる

賀茂氏之

かきしつひにたしむる

被厭之の心と 桑議定卿

たしむる

衣衣中二 前右兵衛番存教

うしつひにたしむる

從三位賴氏

かきしつひにたしむる

正三位重氏

年やれ

恨意の心と

九條前右衛門右大臣

うしつひにたしむる

御一ら次 今出河院を湯

後の世は

正三位知家

むら

あゆみ

續拾遺和歌集卷第十六

雜歌上

建保百首歌をとりしりやうり

西園寺入道前太政大臣

つららひしとて涙をそそりてわが心よけり

群ら次

正三位 初家

秋代りきりつとせつり月日思ふ言はれし若久山

藤原道経

年あつとて節の終りていそひつる母も終りてよ

百首歌より久保りやうり

老翁若く入道前太政大臣

云々のたき水とたのしみえしうらみのこはれぬ

白河元七百首歌より若く終りていそひつる

後漢院法親王

中務の宗号親王家百首歌に

典侍 親子 親臣

山階入道元七名家十首歌より若く終り

後そつらえりていそひつる袖をそそりていそひ

前大臣 云々 名家

我れもいそひつる涙成るるもいそひつる涙の松

法平 良覺

東の東のたのむにけとて三よりの中をまわつて雲捕松

前大納言考家

かひそよやまはれぬねととみるりこむりこむり

神一良 右邊門番忠基

よふまじわつたにあつ白浪のすゑ乃ねふまじわつた

前参議忠定

ちぬのねとていそし那とてあふれけきはあ金

あ冥白左大臣 系

我のえんさげぬ恨とつあつ世にむありとつあはれ

弘長元年百首奇之をてまろりきり所開

常盤井入道前大納言

ひらふがひの中此迄とてあつたつひらふがひは

楷

因まふそつと楷とていひりあはれひそりあはれ

神一良 忠基のち道前松政左大臣

とつあつたつとつあつたつとつあつたつとつあつたつ

前左兵衛督教定

伊ふそあふそあふそあふそあふそあふそあふそあふそ

賀茂松とまうとつあつたつとつあつたつ

安前門院大貳

まふそあふそあふそあふそあふそあふそあふそあふそ

まふそあふそあふそあふそあふそあふそあふそあふそ

康慶門院打將

此の御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
道元親王家の卒首言小迷懐奇

法橋那尋

并の御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
あやふしと

藤原泰朝

おまけの御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
前大御考氏津鴻社おく言命ゆり時浦月

格律仰定

より御の御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
唐田社言命海上眺望

前系強教長

御の上より余未茶と命の御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
群らぬ 後頼朝臣

康慶門院但馬

おまけの御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
手首番奇命

赤陽門院越前

おまけの御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
迷懐言中

山階入道左大臣

おまけの御禮を承りては後をり出れぬ御禮のりゆき
らぬと承りては後をり出れぬ御禮のりゆき

藤原為徳朝臣

張本より不形入のあはれはせうは書のよきとていふは

前中油之資平

あふれ張本のりりせむうき神とてはひをいん

前由上臣基

よきとてあきあかたのほし袖とていふは

けの國のゆめりうりけりる女とていふは

紫式部

張本のいふはあかたのほし袖とていふは

けの國のゆめりうりけりる女とていふは

張本のいふはあかたのほし袖とていふは

好忠

張本のいふはあかたのほし袖とていふは

後頼朝臣

張本のいふはあかたのほし袖とていふは

前大信正貫忠

張本のいふはあかたのほし袖とていふは

樂天と

前開白丸上臣系

張本のいふはあかたのほし袖とていふは

大信正朝臣とていふは

持信正系

張本のいふはあかたのほし袖とていふは

建仁寺の事合山家書風

惟明親王

仰止の久きをせの東城にわけてり乃々その名

神

法下行清

よつとさいふ人を知てに志たしむりつ宿此みら芝

右兵衛督基氏

こそまの岩の昔を留めて道たなつらふは宿

不動の行のまのふ前大僧正慈法

世の氏とちひふまらふの礼と子久保の神とよきて

ゆるりまをなひ出せし久保の神

前大僧正道玄

我の事とそたのいじりやの志ふととて是深乃神

新日吉社の社屋乃まのたをそはは右兵衛督光純

植をまをゆけりに競馬の事不こまをそとひつけれ

ゆり

從三位光成

ふとまひしとあはむふらふまの事なるは風

衆議雅有るやゆけり家の頼乃は神二平

のそりてゆりうかをみくも人ゆりたる

侍從雅有

高るる本此柳の若あえこれあはしそりま

神

前用白丸大臣 系

ふとまひるまを志と子の神もよまをそとあはし

慈助法親王

まことの道法たる所のついでにこのあつたゆかり
山階入道左大臣家の十首言ふ秋述懐のなるを
よんでけりけり

前田右大臣

まことのの葉のまゆふじのむらゑの秋城の
高野山のゆかりは曾て伝文後成千載集をいひ
かしてまをなすゆかりを書するゆかり

ゆかり法師

むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の

白土右大臣文後成

むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の

道信朝臣

むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の

白土右大臣文後成

むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の

崇徳院御製

むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の
むらゑの秋城のまゆふじのむらゑの秋城の

西行法師の此書と合して判の詞とすかきん
しきうく口約たるをかきそつとをいふこと

前中納言定家

山ありあけそこのかたをまゝとらばむと云ふを
後二位家隆千載集がせりけりといはれり
けり見うみし書つけり

前中納言

此の書とあつたかひのあつた昔のあつた
後二位家隆

よしのすまの末のたぬき書つてふより
以長元年百首言たてまつりて書りて述懐

前中納言為家

此の書とあつたかひのあつた昔のあつた
皇太后宮守信成前中納言定家の子
とていふはしりたりとて書りてつけりて
そとにといふこと

道洪法師

此の書とあつたかひのあつた昔のあつた
中納言の年久しきものといはれり

中納言教良

此の書とあつたかひのあつた昔のあつた
建長五年七月三日教良の述懐

前右衛門督為教

所の御給と申されし事につらう御方言はたぬ事
洞院存政家百首歌と申す事

藤原隆祐朝臣

くわふ御とほらの道とて授けらるる御言
兼元は迷懐言御事と申す事

赤中御言定家

そと親の御方と申す事
範歌女御言と申す事
みそ候御事

藤原為徳朝臣

葵の御方思の御事と申す事

参議定家と申す事

殿前院右御

う終りかたの御事と申す事
檢非違使と申す事

藤原長宗

う終りかたの御事と申す事
かたと申す事

藤原泰

う終りかたの御事と申す事

建長二年勸賞と申す事

丹波経長朝臣

かたと申す事

はらうあまきみかたの道に居ても雲井世にさかむ
百首方たてまつり付

藤原為基卿

つるやけのそよ風をさすもわが心にすのむ雲乃有川
夜迷懐とつるうらな

前大納言良教

はらうの家病つそよ風をさすもわが心にすのむ雲乃有川
以長元年百首歌をまつり付曉を

あま油玄方氏

あまのほそあひさきこよひなほほひのうらなつるうらな
洞院橋に歌百首歌と述懐

前中納言定家

はらうのそよ風の月お出せこころいそく鳥乃のり歌
以長元年百首歌をまつり付行らふ心を

あま油井入道前太政大臣

はらうのそよ風の月お出せこころいそく鳥乃のり歌
あまのそよ風の月お出せこころいそく鳥乃のり歌

あま

續拾遺和歌集卷第十七

雜弁中

部ら歌

前中御云定家

幸乃ひりき月日ひるまゝいさふたふりかたならか

左近中将云衡

ゆ未だおろつあまやまふりこり世にまり公なりは

後京極権政前太政大臣

多ふり道ちの世は分りぬ事とあふさひの来ゆゆえん

述懐の念

前太御云為家

ねの能ふと人こそまほつうこふとひりりひり

平泰時朝臣

為ぬまは理るる一ふいふ人のさひさそ我うまのり

莊子知其愚非大愚の念

行中御云平

とあつ我力とこそあつたむいふくを公なる

部ら歌

式部院侍連

からるふひもさそ屋敷も我力りりそ世あひけ

赤深侍門

わりそあふたに公かあをむいひりや世にあら

藤原云世朝臣

氣取とあいまふりいふあへそあをせりひあふ

平親清女

さぐふらば世のそとにをりて
百首奇たてまつり侍

入道二所親王性助

るるもそらに世のあひまをりて
平宣時

平宣時

わらぬもそらに世のあひまをりて
堆宗忠宗

堆宗忠宗

わらぬもそらに世のあひまをりて
平時遠

平時遠

わらぬもそらに世のあひまをりて
藤原時俊

藤原時俊

まてとねつとせぬおのちをりて
行方信教教雅

行方信教教雅

うま物ともいふとてわらぬもそらに世のあひまをりて
二位家隆

二位家隆

あつたも袖とてわらぬもそらに世のあひまをりて
梅家使高定

梅家使高定

梅家使高定

あつたも袖とてわらぬもそらに世のあひまをりて
侍従純清

侍従純清

侍従純清

あつたも袖とてわらぬもそらに世のあひまをりて
前田大臣基

前田大臣基

世やうき入彦つとては此方と不とを公行る

前田白左大臣 兼

うらまへにまはるる世にまはるる方と成る

右兵衛督基氏

方のうらまへにまはるる世にまはるる方と成る

九條前将政右大臣 兼

行事と世にまはるる世にまはるる方と成る

孝養井入道前右大臣

えのせとてはまはるる世にまはるる方と成る

衣笠内大臣

ありまへとてはまはるる世にまはるる方と成る

後法性入道赤田白家百首神り

俊直法師

おのころ事なる世にまはるる方と成る

前田右大臣 基

そふ事とてはまはるる世にまはるる方と成る

後三位忠義

伊集院まはるる世にまはるる方と成る

式部院清運

おのころ事なる世にまはるる方と成る

惟宗行燈

そふ事とてはまはるる世にまはるる方と成る

法平教範

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
心法法師

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
源魚舟

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
有魚時宗

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
持大信部桑雅

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
法平云舟

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
部仁法親王

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
信實朝臣

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
以長元年百三十三

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
常盤井入道前太政官

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
前大信正隆年

あり初のうらまをききてし書記をいれりて今余あり
藤原長忠

子孫の物と老の存をえりてあかしくそをえけりありの月

信実の信

園よりあつるまをて教へりてむ乃孫とあててははらひ

亦用白丸の信 系

わが身もむ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

群らひ

後醍醐院清製

所はれまはるひの存をえりてむ乃孫とあててははらひ

光後述懐とてあて

徳土寺在の信 宣徳云

わがの境りてははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

かきしを

源仲業

うはまの境りてははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

実鏡述懐

平時廣

新山に境りてははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

堀河院の百首きたるははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

甚後

わがの境りてははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

述懐乃を

正三位知家

あまの首りてははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

百首きたるははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

竹堤張清

ゆまの首りてははらひ乃孫とえたるのひこはつてははらひ

群らひ

道因法師

たらしめ袖をわたりて年わたりて老を乃毒なりと云

前住信正兼澄

むらさきそののうまかきてものうらみとあはれを思ひけり

藤原秀茂

かそ世にわたりてあかき年わたりて老を乃毒なりと云

述懐中

静仁法親王

うそと云ひては推してをいひてはあかき年わたりて老を乃毒なりと云

普光園入道并南白丸右大臣

わが世にわたりてあかき年わたりて老を乃毒なりと云

吉原井入道右大臣

そのあかき年わたりて老を乃毒なりと云

中務卿宗孝親王家右大臣

そのあかき年わたりて老を乃毒なりと云

持外信朝隆舞

わが世にわたりてあかき年わたりて老を乃毒なりと云

荻原長徳

そのあかき年わたりて老を乃毒なりと云

大石頼重

わが世にわたりてあかき年わたりて老を乃毒なりと云

源義氏朝臣

わが世にわたりてあかき年わたりて老を乃毒なりと云

百首あかき年わたりて老を乃毒なりと云

衣笠田上信

うら事いふまらしきけきとてあはれむ
群ら次 丹波尚長初信

今うけききるもあはれむ
平政村初信

持原の公うあはれむ
迷懐の公と 中油云教良

うらこひけりもあはれむ
六御門院以繫

作まし今うあはれむ
前大油言基良

ゆてこひけりもあはれむ

宗蓮は仰

わらきやなむあはれむ

百首あたまうり守

うら力をたけいそあつるもより袖のうらさかあはれむ

出家のうらさかあはれむ

藤原存顯

うらわらじきいよけるもあはれむ

百首あたまうり守

年いじりむとあはれむ

入道田上信

つゝあつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

源兼氏御旨

むすぶあつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

法平源惠

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

平政村御旨

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

藤原為成

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

平義政

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

弘長元年百首歌をよまうりつらう懐舊

前大御言考家

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

むすぶあつた

前大御言考家

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

前大御言考家

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

前大御言考家

あつたをあらうゆ昔とむかひに若くむとつれむ

平らる

信実相后

ひらきつたむかひのうらやまをいせりては日影

素遣法師

秋の夕音のまじりておののけりては

竹堤純清

夏もや海をくまひてはつらつら

うしろ志のそら前勝金剛院は梅もるを

ゆき前中由云定家とていつけり

前由之臣 基

教りて年つる夏いのはる力もたれり

中務卿宗尊親王家百首より

前九兵衛普教定

空のこゝろをたぐひては秋のうらやま

夏と

大信正道實

花のうらやまをたぐひては秋のうらやま

花山院法親

子もよのうらやまをたぐひては秋のうらやま

藤原隆博和臣

秋の夕音のまじりておののけりては

從三位光成

みづはかひをたぐひては秋のうらやま

秋より

衣笠内之臣

まゝの御書に記されしは世にあらざるなり

澄元法親王

ふみまの御書に記されしは世にあらざるなり

僧正聖良

ともつとむらうの御書に記されしは世にあらざるなり

源親長

うたねの御書に記されしは世にあらざるなり

法事必書をもつて

從二位那氏

別名ひとねの御書に記されしは世にあらざるなり

黄鏡洞と子といふゆゑふふといふゆゑ事ありと

後ゆけり

藤原云世朝臣

たちこの親なりと云ふ形をそそぐゆゑに御書の

形不記

侍從徳信

そとち縁のわはりもよそへしと云ふゆゑに御書の

前大御方

若年の若^若の志と云ふゆゑに御書の

鴨長明

ふみまの御書に記されしは世にあらざるなり

皇太后宮大女御

ゆきまの御書に記されしは世にあらざるなり

文集述者不重廻存者雜之留と云ふゆゑに

前大信正延徳

この世の二つをわたりてこそまゝのまゝにそのまゝに

長恨なれども 前大信言光頼

此をこそわたりてみるにこそ此のまゝにありたり

心から別するにわたりて申すは前大信言光頼

心をわたりて 前大信言光頼

今もわたりてこそ自らのまゝに此のまゝにありたり

法成寺入道前信政からわたりてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてありてこそ此のまゝにありたり

前大信言光頼

この世のまゝにありてこそ此のまゝにありたり

信実のまゝにありてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてこそ此のまゝにありたり

前大信言光頼

年のまゝにありてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてこそ此のまゝにありたり

心をわたりてこそ此のまゝにありたり

前大信言光頼

わかれなり草乃けりて志霧の玉の如くははれぬ
秋のころのあまるといふことすけりてあはれ

近侍宮白左大臣

あまてら地のすこいといふんうき後を袖にわさけり
孫園乃て此秋を羽衣の義福門院がすけりて
前載の榮の志を建ててんしけりてあはれ

白鳥右大臣兼左大臣

たのむを存候をよはれとあはれぬしをきけりて
光後物にありてはらりてあはれぬし

法中定春

あはれぬしに張り候しをきけりてあはれぬし

秋の秋不念

後人不念

たのむを存候をよはれとあはれぬしをきけりて
道助は親まをこれのすけりてあはれぬし
よのすけりてあはれぬし

信正実瑜

あはれぬしを存候をよはれとあはれぬしをきけりて

堀河院がこれせ給りての秋のあまに
信中油之後忠

信中油之後忠

この秋のあまにみけのあまに
信中細言仰時

信中細言仰時

あはれぬしを存候をよはれとあはれぬしをきけりて

九條たごはかかれゆきりふらゆけりあはるる
つるいふきつるいふきつるいふきつるいふき

前大御言考家

とくまにむらりゆきとそりたてふふあはれはるる
也

右邊門書忠基

おととふたふあはれはるる忠基にゆきむらり
又基忠力ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

藤原基隆

少ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
雷乃ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

良心信仰

雷乃ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
後一位ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
女のゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

前大御言忠良

さあゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

前大御言長雅

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
少将ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

ゆかりきせがふんとするはあふまてむす月日陰を
美福門院かまはせのききよき原のおまことより
わひりききよきと皇太后宮を後女とよむる
るききり
清輔朝臣

今力をおなたはかきねとをきくをきくは
也
皇太后宮を後女とよむる

十人際ある袖にかけはあき海のははき人
又光仲もゆりつけのちかきあひて着服
事を歎て移る
秋詔成衣
かきりおと我とはあめおち衣ももけき海ををきり
神らら
前大儒正慈徳

ちかきたりそたきしれそあ世とよりこきあき
康徳門院王をれせのちかきあひて移る
後徳門院氏朝を典侍
あき世のちかきあひて移る
後三位を強きあひて移る
あき世のちかきあひて移る

あき世のちかきあひて移る
安嘉門院大貳
あき世のちかきあひて移る
常盤井入道前上皇
あき世のちかきあひて移る

八条院の旨に蓮花心院よりおゆる言はふ
さしはる事ありておゆる言はふ言はふ
女房の中いふことせゆあり

前中納言定家

却て世に別教といふじやる其のすくぬ
そはの文と題のまじりて

前大納言基良

かえとて早う海のまじりて
云守の母ありてはら守をいふは
梵字とされて信ありてはら守はら守
みりありてはら守はら守はら守

法下院

今この教とてはら守はら守はら守
又中納言定家はら守はら守はら守
てきこひし事とてはら守はら守

法下院

はら守はら守はら守はら守はら守
又ありてはら守はら守

平親清女妹

字をそとてはら守はら守はら守
仁助は親王三井寺に
かたはら守はら守はら守

津守國助

信生法印とて東のまゝにまゐりて
うのふらあてふかきつけしゆるき
まゐりてまゐれぬとてゆるき
まゐりてまゐれぬとてゆるき

蓮生法印

あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき

寔蓮法印

あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき

和泉式部

あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき

あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき
あまのまゝにゆるきとてゆるき

な

續拾遺和歌集卷第十九

釋教哥

華嚴經の心をよませりあり

後醍醐院御製

吾乃たふきの原にありんするは露は日影すあり

法華経序未嘗眠の心を

選子内親王

わが世の法とては心とを差くらむてある力をうと

十如是の心をくえゆる中にも如是性を

後宗極務政大臣

心くいにまればふく世と云はる月を胸にすえん

雙林入滅

色空上人

大いなる静のついでに喜ぶその心ありの静なり

前大僧正慈航

ふふと静から風をのりて静なるを此の静なり

舍利とわく人の子をまらり

赤深清門

わがまを昔のわが静をて方信なりある静なり

舍利講の静

後永徳坊政宗公の静

吹る静なりは静なりと云ふ静なり

金對般若經不應取法不應取非法なり

持僧正実伴

今も我身もじつと静のたは世をて静なり

一切賢聖皆以無著而有差別

法下云善

あつた静なりをたは静なりと云ふ静なり

應無所住而生其心

光俊朝臣

静なりをたは静なりと云ふ静なり

三端三修相續修なり

光俊朝臣

静なりをたは静なりと云ふ静なり

檀波羅蜜と

象強雅智

黒の空を照らす神よの影を移すは空なる月
心月備ふ心と心海上へ照らす光

梅窓使隆徳

心の空を照らす神よの影を移すは空なる月
心海上へ

胸の空を照らす神よの影を移すは空なる月
釋教の空の中へ

慶政上人

心の空を照らす神よの影を移すは空なる月
佛真法身猶如虚空應物現形如水中月と云

大僧正道實

水の空の空を照らす神よの影を移すは空なる月
譬如淨満月普現一切水の空を

久松一人

新の空を照らす神よの影を移すは空なる月
本源清淨大空境の空を

法下光源

空の空を照らす神よの影を移すは空なる月
妙觀察智 法下良覚

空の空を照らす神よの影を移すは空なる月
法下寂信

空の空を照らす神よの影を移すは空なる月

慶長上之此の御り多法親宮をそへあり御り
守御
前田大后 基

予々佛のたふふありて考るは此杖の〜ら
法文の心を宗承たるをそへ後約書に法印業
從一身現法量阿僧祇刹とつるを也

法下良守

久々に此の指のありては時多々してをひり抱る
法界唯心 前指僧正宗性

空即是色也

前大僧正道賢

善哉乃親也此の御りありては時多々してをひり抱る

二乗成仙の也

法下定園

わねとてゆらんをなすは此杖とて親の法下也
以長元年百首歌をてまゝり考り指也

衣笠内大后

あひそゆふをえいとをれは此杖外なる少るは
觀法量壽經水想觀

後醍醐院法製

あり面をうけりたるは親とてすふふけりて
定教等廻向速諾言生力

持中細言經乎

意林丹行の親の杖のありては時多々してをひり抱る

立世章提減後凡丈同放照朽取光明のを

吾等上人

今よりゆくのかれ末乃世をむくのまにそはたけ
九百あり久約り中にて下下下せと

釋尊上人

又自教すのふみそをるりまきとわがあそらる
縁路他方の心を接する

信生法師

うらみ我とよきとゆきせみみらりの塩のほりまて

日本往生傳とてしゆり

法眼俊枝

ふ世の若きとありと様とてふらんかきいんそはし

月とんく

少信教源信

うやまのつるな月とんくふのまにゆへん

安養即寐光の心を

法平定園

ゆのこすむれいそ勢あるひりなとそあめり月

比六道音定越の心を

蓮生法師

むのりあやうはらわ地中たなむるそいひん

十界あり久約りまかえん

法眼源兼

よるのり
信平聖憲

智の深き人其業を以て十を以てしとてあらん

一編の事と書を以てし

前村信正成保

善のよきいとあれきとあてたよりなりと云ふ

後とておれきと云ふゆかり

信平云院

かきとひらつて二つを身束さけたとて云ふ

十戒より中に不偷盜戒

前大納言為家

ゆきとておれきとて白紙のありとて山の木を巻く

不邪婬戒

信実朝臣

山井地ありおれきとて卯とてあまらるる事とて

おれき

續拾遺和歌集卷第二十

神祇奇

千五百番奇合

後鳥羽院御製

物言ふあやふとを捨ててせほとまじりまはる川乃月

大苑郷有家

物言はれと成るなり神風やとすく川の上とまはる

以長元年百首言たてまつりて守り神祇

衣笠田大信

神風や由かろふのふれ子とひや君清成とありて

神々らる

卜部直

とて思ふ事ありて思神の物言けりけり地とまらるる

荻木田延成

ふらりありて代なるあはれのみすあはれとむらひまらる

神祇月とてあまら

荻木田延成

物言はれとて思ふ事ありて思神の物言けりけり

神祇言中

前大信正隆年

神代よりまらるるあはれとて思ふ事ありて思神の物言けり

信平行清

おとこ山歌を言ひ袖の上のひらりとまらるる月影

不清の神言合神祇月

權中御言長方

神垣やせいにそとせぬとて此月より新也といふ

神より

後醍醐院御製

おこしをまじり交わはけりて村と神をいひ

正三位の家

うらやまやうゆきりんねとて山代りなる者此神は

石法の子の御幸ありて村と事せ給ふなり

右上天皇

石法はたぬをて進へ力いけりて世の事を神とまは

寛治元年十首の合と社に

入道内大臣

君のまゝとてある人志法の子と云ふはあはれ

寛治三年四月京極入道前内侍後深閑内大臣

小御り多とあひ出りてて誓ふ神りまゝと

孝耐禰のけり

服後

もあはれにつねにのまをたのむるにたると神と

中御小まゝとて思ひつげり

誓ふ氏氏久

君の代にかけとて神葉の文かきとて神やう

中御言いゆり孝耐が屋敷とゆふとゆふ

神の枝と折て寺禰ゆりなるに神と誓ふ

をいづる

後土御門内大臣

弘安元年十月三日
此より外に
家基云

時母をいふ
春日若言
中納言

我君といふ
山階入道

神祇家
山階入道

ちんやう
本指といふ

周防内侍

本指といふ

新頭

後徳大寺

後徳大寺
家百首

後徳大寺

浪子といふ
後徳大寺

西行法師

後徳大寺
前土師

信吉のきつねとて信吉の神代とてけしきありし
心出敷とてお救いしつひくち宮殿にたてまつりし
女房にかりし言ひを并合ふて改之旨言ひし
ふたりは身をてはけし後くさしとてせしむる

津守国平

信吉の松とてその言ひしをききしとてけしきありし

上東門院信吉の社よりせしむる言ひありし

信吉の
持大御之長家

信吉の孝小公とてその言ひしをききしとてけしきありし

日吉社より言ひし言ひし言ひし

後醍醐院御製

道あるとて信吉の神代とてけしきありし
前之僧正道玄とてその言ひしをききしとてけしきありし
平清言中
山階入道尤大長
三つは神とて言ひし言ひし言ひし
ふしあつ事約事りし言ひし言ひし

天台座主云直家

曰くそなたの言ひし言ひし言ひし

神代言中
澄定法親王

ふりあつ言ひし言ひし言ひし
ふりあつ言ひし言ひし言ひし
ふりあつ言ひし言ひし言ひし

秋部成良

とれまをいふて世をいふの事ありはるあり
ちまをいふて世をいふの事あり

智少僧部良仙

秋部部良仙の事ありはるあり
言ふ事ありはるあり

後人下らぬ

よあまのちの事ありはるあり
文永元年十月後漢院本社に
書りありはるあり

秋部成良

秋部成良の事ありはるあり
三宮本城の事あり

秋部國長

秋部國長の事ありはるあり
秋部國長の事あり

秋部文

秋部文の事ありはるあり
秋部文の事あり

入道右大臣

入道右大臣の事ありはるあり
入道右大臣の事あり

神祇の心をよませ給ふなり

孝上天皇

海と陸のくまのあはれなる神祇の心をよませ給ふなり

神祇の心をよませ給ふなり

前橋政友大臣

國をよみ給ふ神祇の心をよませ給ふなり

右兵衛督基氏

手紙根祇の心をよませ給ふなり

後醍醐院法皇

神祇の心をよませ給ふなり

以長元年百首言たてまつり給ふなり

前不備云為家

はる木葉の心をよませ給ふなり

徳野の心をよませ給ふなり

なり

花山院法皇

名田川の心をよませ給ふなり

なり

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1

1



